国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
National Center of Neurology and Psychiatry

2026 年 11 月 10 日
国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター（NCNP）

双極症患者の自閉傾向は役割・社会的 QOL の持続的な低さと関連

―外来患者 78 名を 12 か月間追跡―

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部の山田理沙室長、住吉太幹部長らの研究グループは、NCNP 病院気分障害専門外来で双極症と診断された外来患者 78 名を 12 か月間追跡しました。その結果、自閉傾向が高い人では、低い人に比べて、仕事や家事、人付き合いなどの日常生活や社会生活で支障を感じやすく、その差は調査開始時点および 12 か月後に認められました。一方、自閉傾向が高い人でも、12 か月の間に抑うつ症状は和らぎ、こころの健康や日常生活や社会生活への支障も軽減しました。この研究成果は、国際学術誌『Journal of Psychiatric Research』に 2026 年 9 月 5 日に掲載されました。

■研究の背景

双極症は、気分が落ち込む抑うつ状態と、気分が高揚して活動的になる躁状態または軽躁状態がみられる精神疾患です。気分症状が落ち着いた後も、人付き合いをおっくうに感じたり、仕事や学校への復帰が難しかったり、家事になかなか取り組めなかったりするなど、生活上の困難が続くことがあります。そのため、症状の改善に加えて、日常生活や社会生活の回復に関係する要因を明らかにすることが重要です。これまで、自閉傾向と社会生活上の困難との関連については、主にある一時点で評価する研究が行われてきました。一方、同じ患者さんを継続して追跡し、日常生活や社会生活における困難が時間とともにどのように変化するのか、また、その変化と自閉傾向がどのように関連するのかを検討した研究は限られていました。

■臨床的意義

自閉傾向が高い群において、12 か月間で抑うつ症状や役割・社会的 QOL は改善しました。一方、自閉傾向が低い群と比べると、役割・社会的 QOL は低い状態が続いていました。このことから、双極症の診療では、気分症状だけでなく自閉傾向にも目を向けることで、仕事や家庭での役割、人付き合いなどに困難を抱えやすい患者さんを把握し、一人ひとりの特徴に応じた支援につなげられる可能性があります。

■研究の内容

1 対象者と評価方法

2018 年 2 月から 2024 年 11 月までに NCNP 病院の気分障害専門外来へ通院した双極症患者 155 名を募集しました。このうち 130 名が調査開始時の評価を受け、78 名が 12 か月後の評価まで参加しました。この 78 名の平均年齢は 34.9 歳で、双極 I 型が 24 名、双極 II 型が 54 名でした。

自閉傾向は、本人が回答する質問票「成人用対人応答性尺度（SRS-A）」で評価しました。先行研究の基準に基づき、自閉傾向が高い群と低い群に分けました。12 か月後まで参加した 78 名のうち、56 名（71.8%）が自閉傾向の高い群に該当しました。なお、自閉傾向が高いことが必ずしも自閉スペクトラム症の診断を意味するものではなく、自閉スペクトラム症の診断が確認された人は 4 名（5.1%）でした。抑うつ症状と躁症状は、それぞれハミルトンうつ病評価尺度（HAMD-17）とヤング躁病評価尺度（YMRS）で評価しました。健康関連 QOL は、質問票 SF-36 を用い、身体面、精神面、日常の役割や社会生活の 3 つの側面から評価しました。12 か月間の変化や両群の違いは、繰り返し測定したデータを分析する線形混合モデルで調べました。QOL の分析では、調査開始時の抑うつ症状の強さの違いも考慮しました。

2 気分症状の経時的変化

・抑うつ症状は両群で改善しましたが、自閉傾向が高い群は低い群と比べると、調査期間を通じて症状が強い結果となりました。

・躁症状には 12 か月間で統計学的に明確な変化は認められませんでした。一方、自閉傾向が高い群では、低い群に比べて躁症状の得点が統計学的に有意に高い結果となりましたが、得点差は小さいものでした。

3 健康関連 QOL の経時的変化

・身体的 QOL には、12 か月間で統計学的に明確な変化や両群の差は認められませんでした。

・精神的 QOL は、自閉傾向の高低にかかわらず、全体として改善しました。

・役割・社会的 QOL は、自閉傾向が高い群では低い群に比べて低く、その差は 12 か月後もみられました。一方、両群とも調査開始時に比べて改善が統計学的に認められました。

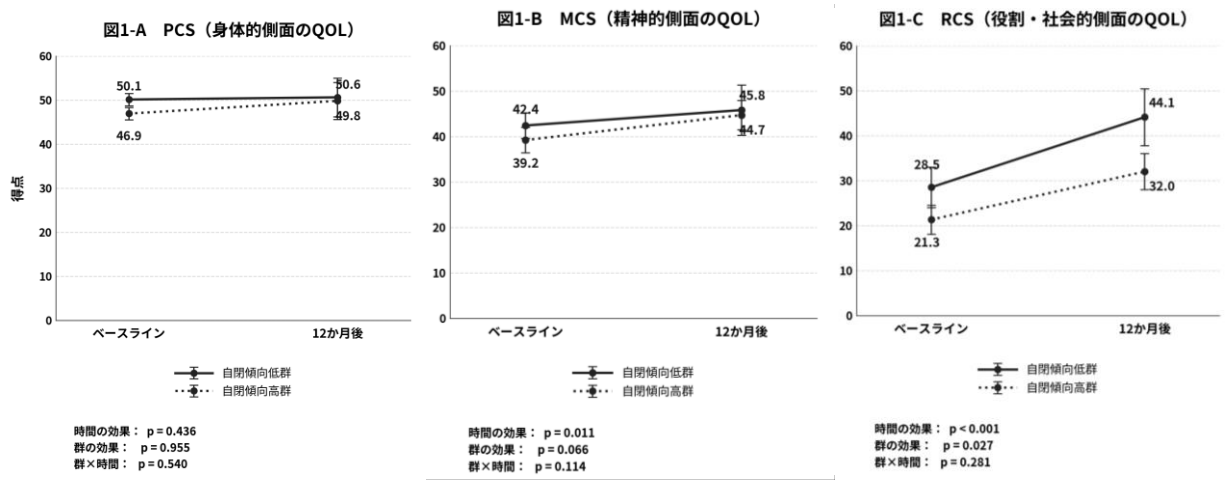


図 1　SF-36 による健康関連 QOL 得点の 12 か月間の変化

点は各群の推定平均値、エラーバーは標準誤差を示す。

■今後の展望

本研究では、調査開始時の評価を受けた人の約 4 割が 12 か月後の評価に参加しておらず、参加した人と参加しなかった人との就労状況の違いが結果に影響した可能性があります。また、自閉傾向は本人が回答する質問票のみで評価しており、医療者による評価や構造化診断面接は実施していませんでした。さらに、服薬遵守の状況や発症前の知的能力などについても、十分に調べられていません。

今後は、複数の施設でより多くの患者さんを対象とした研究を行い、自閉傾向と社会生活上の困難との関連をさらに詳しく検討する必要があります。また、こうした研究を通じて、個々の患者さんの特性や社会生活上の困難に応じた支援方法の開発につながることが期待されます。

■論文情報

論文名：Autistic-like traits and longitudinal changes in health-related quality of life among individuals with bipolar disorder: A 12-month study

掲載雑誌：Journal of Psychiatric Research

著者：Risa Yamada, Hiroshi Kunugi, Takuma Inagawa, Kotaro Hattori, Tomoko Kurashimo, Naoko Ishihara, Haeeun Song, Sawako Sumiyoshi, Sumiko Yoshida, Andrew Stickley, Tomiki Sumiyoshi

DOI：https://doi.org/10.1016/j.jpsychires.2026.09.011

■用語解説

双極症：気分が落ち込み、意欲が低下する「抑うつ状態」と、気分が高揚したり、活動性が過度に高まったりする「躁状態」または「軽躁状態」がみられる精神疾患です。

自閉傾向：人とのコミュニケーションの難しさや、興味・行動の偏りなど、自閉スペクトラム症に関連する特徴を指します。その程度は人によって異なり、自閉傾向が高いことだけで診断が決まるわけではありません。

健康関連 QOL：心身の健康に関わる「生活の質」を指します。体の動かしやすさや心の状態、仕事・家事・人付き合いへの支障などを、本人の視点から捉えるものです。

線形混合モデル：同じ人から複数の時点で得たデータを分析する統計手法です。本研究では、12 か月間の変化と、自閉傾向が高い群・低い群の違いを調べるために用いました。

■特記事項

本研究は、国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費（29-S8、5-3、6-1）および JSPS 科研費（JP24K10696）の支援を受けて実施されました。研究計画は NCNP 倫理委員会の承認を受け（承認番号 A2021-081）、すべての参加者から文書による同意を得て実施されました。著者らは、本研究に関して開示すべき利益相反はないと報告しています。

■お問い合わせ

【研究に関すること】

国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所　児童・予防精神医学研究部
山田 理沙／住吉 太幹
E-mail：sumiyot(a)ncnp.go.jp

【報道に関すること】

国立精神・神経医療研究センター

総務課 広報室
E-mail：kouhou(a)ncnp.go.jp

※E-mail は上記アドレス(a)の部分を@にかえてご使用ください。